

2015年5月24日川越教会

人生の主役は

加藤 享

【聖書】 使徒言行録 20 章 17～24 節

パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。

【序】 横川宣教師を迎えて

今日はマニラの**日比聖書教会牧師横川知親先生**から証を伺いました。先生との交わりは、私たちがシンガポール時代に、マニラに転勤した教会員一家をお訪ねしたことがきっかけです。1997年11月23日、私は日比聖書教会で礼拝説教をさせて頂きました。3対1の割合でフィリピンの方が多く、にぎやかな礼拝と交わりでした。

横川先生夫妻は大分県の中津扇城教会の海外宣教会から宣教師として派遣されて、**1981年2月**にマニラに来られ、翌年1月からフィリピン人と結婚された日本婦人と3人で礼拝を始めました。4年後にその婦人が捧げた170坪の土地に、日本の諸教会からの献金で教会堂が建ちました。大井バプテスト教会出身の小林扶美子宣教師も、西南神学部の教師だった夫に先立たれた後、2人のお子さんを育て上げると、56才で応援に来て下さり10年になっていました。

その折りに先生夫妻、小林宣教師と私たち夫婦の5人で、発足1年余の小さなシンガポール国際日本語教会が、日比聖書教会の働きに少しでもお役に立つ

道は何か、5時間程話し合いました。そして日比教会の将来を担う人材の育成に微力ながら継続的な**奨学金支援**をすることにしました。そしてスラムから救い出された**ヨナタン君**が中学、高校、大学、神学校で学び、現在は**副牧師**になって日比聖書教会を支えてくれています。感謝です。

当時マニラは交通渋滞がひどく、30分で行ける所に悪くすると4時間もかかりました。気軽に外出できません。警察官が理不尽な言いがかりを付けて罰金を取り上げ、また泥棒の手引きをします。身の安全を計るために絶えず緊張して暮さなければなりません。このような都市によくも35年も暮らしてこられたものです。本当に偉いですね。

その上ご夫妻とも、色々な病気にかかられました。奥さんが、10年前に手術した**腸のガン**が今回再発し、来月に沖縄の病院で再手術を受けられます。熱い祈りが必要です。皆さんもお覚えください。

[1] パウロの伝道旅行

さて今日は、主イエスの復活された日イースターから50日目の**五旬節**。主が約束された通り、祈っている弟子たちに**聖霊が豊かに降り**、弟子たちは**力を受けて**、福音を大胆に語り始めた**記念日**です。そして復活された主イエスのご命令「**全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい**」(マルコ16:15)が実現される運びとなったのでした。

弟子たちは皆ユダヤ人です。旧約聖書に基づいて**異邦人**とは食事を共にしない、交際もしないという**ユダヤ教信仰**を身に着けていました。それが主イエスと出会い、弟子となりその働きを目の当たりにすることによって、この方こそ旧約聖書が予言してきた**メシア(救い主)**だと信じるようになりました。そして主の十字架の死と復活、聖霊の降臨を通して、**福音宣教者**にされたのでした。

しかし**世界宣教の立役者**として神さまがお選びになったのは、ユダヤ教徒の中でも最も熱心な律法主義者ファリサイ派のホープ、キリスト教迫害の先頭に立つ若者**パウロ**でした。彼はキリスト教徒迫害の最中に**劇的な回心**へと導かれ、**キリスト教徒**となり、更に全世界に福音を宣べ伝える**伝道者**として神さまに選ばれ、用いられることになりました。それが使徒言行録の13章以下の記録です。

パウロの**第一次伝道旅行**は小アジア地方、今のトルコです。**第二次伝道旅行**で、トルコから更に西へ進み、エーゲ海を渡り、今のギリシアのフィリピ、テ

サロニケ、アテネ、コリント等を伝道し、帰りにトルコのエフェソに寄って、アンティオキアに戻りました。福音が**アジアからヨーロッパへ**と広がったのです。**第三次伝道旅行**は、第一次、第二次旅行で伝道した小アジア、今のトルコの諸教会を訪ね、ヨーロッパ寄りの**エフェソ**で3年間腰を据えて伝道した後、騒動が起こったのでギリシアへ避難し、コリント教会に三か月間滞在しました。その時に、**ローマの信徒への手紙**を書き送っています。それからエルサレムに戻る途中、エフェソ教会の長老たちに**ミレトスの港**まで来てもらって、別れを告げました。それが今日の聖書箇所です。彼はエルサレムで騒動に巻き込まれて逮捕されますが、ローマ市民権を持つ者として皇帝に直訴し、ローマに連れていかれます。そしてパウロの伝道は**ローマで終り**、使徒言行録も終ります。

[2] 危険なエルサレム行きを決意した理由

今日の聖書の記事で 22～23 節に「そして今、わたしは、“**霊**”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、**投獄と苦難とがわたしを待ち受けている**ということだけは、**聖霊**がどこの町でもはっきり告げてくださっています」と語っています。

そしてこの別れの記事は、次のように終わっています。「このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。**人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した**。特に自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に**悲しんだ**。人々はパウロを船まで見送りに行った」。

では投獄と苦難が待ち受けていると聖霊が繰り返し彼に示しているにもかかわらず、また皆が引き止めるのに、パウロは**どうしてエルサレムに行く決心をしたのでしょうか？**

パウロはミレトスに来る前、コリント滞在中に、ローマの信徒たちに手紙を書き送りました。その終わりの部分でこう書いています。「しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、**イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います**。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。」(15:22～24)

パウロがローマの信徒への手紙を書き送った時には、ローマから更に西の果てのイスパニアまで伝道旅行に行く積りでいたことが分かります。矢張り彼は「**地の果てまで福音を宣べ伝えよ**」という復活の主のご命令を、はっきりと

自覚しています。生前の主イエスの弟子ではなかったパウロに、この使命を自覚させたのは、**聖霊**に他なりません。

ところが同じ聖霊がコリントを発ってエルサレムに向かう旅を始めるや、投獄、苦難の予告を示し始めたのです。それならば、コリントからローマに直行した方が良かったのではないのでしょうか。コリントからの方がはるかに近いのです。地の果てイスパニアまで行く使命が果たせなくなるかも知れない、**危険なエルサレム行き**を、パウロはどうして決行したのでしょうか。

その鍵が、ローマへの手紙の先程の続きに記されています。「**しかし今は**聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです」「それで、——**募金の成果を確実に手渡した後**、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています」

つまりマケドニア州、アカイア州、即ちフィリピ、テサロニケ、ベレヤ、コリント等の**ギリシア異邦人教会**の人々が、遠く離れた福音の原点である**エルサレム教会**の貧しい兄弟姉妹たちに**愛の募金**をして、自分たちの**心を伝えたい**と思った信仰を、パウロは**非常に大切に**したからです。世界がキリストに在って一つ結ばれている**素晴らしい証**と受けとめたのです。だから聖霊が命の危険を繰り返し示しても、自分の決められた道を**走りとおそう**と決意したのです。

[結] 聖霊の導き

果たしてパウロには、エルサレムで投獄と苦難が待ち受けていました。しかし不思議にもその都度、命を守られて、皇帝の兵士たちの護衛のもとに念願通りローマに行き、そこで福音を伝える働きが出来たのでした。**聖霊の守りと導き**以外の何ものでもありませんでした。

パウロは、地の果てまでもという復活の主のご命令に従って、ローマを通りイスパニアまでを**自分の人生のゴール**と決めていました。それがエルサレムに行けば、そこで死ぬことになるかもしれません。しかしそれが**神の御心ならそれでもよい**という信仰がパウロにはあったのです。だから皆から泣いて抱きつかれても、エルサレムに向かったのでした。

すると神さまはそのパウロに、イスパニアまでではなくローマまでのゴール

をお与えになりました。まさに**聖霊**は、**神さまの御心**を私たちの人生に**実現**していく**神の力**なのです。パウロは「わたしは**霊に促されて**エルサレムに行きます」(22節)と言っています。他の道をと望んでも、祈りの中でどうしてもこの道をと促されることを、私も度々経験してきました。そしてシンガポールか中国に居るはずの私たち夫婦が、今ここ川越教会にお仕えしています。皆さんも同じような経験をして来られたのではないのでしょうか。横川先生ご夫妻も、とっくに日本に帰って来られたのに、色々な病気を患いながらも、生きるに厳しいマニラに35年も留まって、日比教会に仕えて来られています。

4月19日の説教で私は「**歴史の主役は誰か?**」についてお取次ぎしました。全世界に福音をとるという世界宣教の主役に、キリスト教徒迫害の急先鋒パウロを用いるなどという計画を、一体誰が考えつくのでしょうか。本人自身すら思いも及ばなかったことでした。まさに**世界宣教の主役は神さま**です。

「**人の一歩一歩を定めるのは主である**。人は自らの道について、何を理解していようか」(箴言 20:24) **パウロの人生の主役**もパウロではなく、神さまでした。ギリシアの異邦人教会の愛の献金をエルサレムの貧しい信者達に危険をおかして届けながらも、命を守られ、ローマまで行くことが出来ました。聖霊の導きは「万事が益となるように、共に働く」(ローマ 8:28) のです。私たちも神さまの**霊**、**聖霊の導きに聞き従う信仰**をしっかりと持ちたいものです。そのために礼拝を大事にし、聖書の学びと祈りを大事にして参りましょう。

お祈りします： 神さま、主イエスさまの十字架の死に、おびえて身を隠してしまった弟子たちが、復活の主によって信仰を取りもどし、聖霊をいただいて、大胆に福音を宣べ伝える者に変えられていきました。更に貴方は、迫害者のパウロさえも、悔い改めさせて、世界宣教にお用いになりました。パウロは聖霊の導きに忠実に聞き従って、使命を果たしていきました。私たちの内にも貴方の御力、聖霊が働いて下さっていることを感謝いたします。貴方は私たち一人一人にも、使命をお与え下さっています。パウロは聖霊に導かれて、さまざまな困難や迫害を乗り越えて、その使命を果たしていきました。私たちもまた、聖霊の導きに従って自分の使命を果たしていく者になってください。そのために、私たちの信仰を強めてくださいますように。横川先生のマニラでの長年にわたるお働きを感謝します。どうぞ幸子夫人の病をお癒し下さい。日比聖書教会をお守り下さい。このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお捧げします。 アーメン